福永　竜太氏の学位論文審査の要旨

論文題目

郡部における高齢者の抑うつと独居の関連

(Association with depression and living alone among the elderly in a rural community)

超高齢化社会の到来を迎えた我が国では、うつ状態は高齢者において最も重要な精神保健問題の一つである。我が国におけるこれまでの北日本を中心とした地域調査によると、高齢者のうつ状態や自殺と家族形態との関連については同居家族がいる者に多いとする結果が報告されている。本研究は、南日本に存在する熊本県の郡部における高齢者のうつ状態に関する実態を調査し、そのリスク要因を明らかにすることによって、うつ状態への予防介入に結びつく方策の考案を目的とした疫学研究である。

研究方法として、熊本県内郡部A町（人口17473人、2008年）に在住する65歳以上の在宅高齢者1552名を対象とし、2009年10月1日から12月2日を調査期間として実施した。調査方法は輸送法で行い、自記式の質問紙調査法を対象者に郵送した。有効回答数は、964人（回収率62.7%）であった。うつ状態の対象者は、50.2%を占め、独居とうつ状態に強い関連が認められた。またソーシャルサポートの低い得点は抑うつとの関連があり、独居者と同居者で比較すると、独居者が有意に低い得点であった。さらに世代数と抑うつには弱い関連があった。多重線形回帰分析においても、独居はうつ状態との関連が認められ、良好なソーシャルサポートをもっていることにより独居の影響の有意差が否定された。

審査では、未回答者の属性について、先行研究と異なった結果が得られたことに関する考察、独居となった経緯による考察、性差に関する解釈、使用したうつ評価指標の感度と特異度、調査地域のうつと自殺に関する基礎データ等の様々な質疑応答がなされ、申請者はおおむね適切に回答した。

本研究は、十分なサンプル数を確保されたうえで実施され、独居がうつ状態の関連要因であることを明らかにした。また、独居のみがうつ状態の決定的な因子ではなく、ソーシャルサポートが独居によるうつ状態のリスクを低減する可能性を示唆する成果が得られた。本研究は高齢者のうつ状態の今後の臨床及び予防に寄与するところが多く、学位の授与に値すると評価した。

審査委員長　公衆衛生・医療科学担当教授　加藤貴彦

審 査 結 果

学位申請者：　福永　竜太

専 攻 分 野：　神経精神科学

学位論文名：　郡部における高齢者の抑うつと独居の関連
(Association with depression and living alone among the elderly in a rural community)

指　　導：　池田　学　教授

判 定 結 果：

㊀　　不可

不可の場合：本学位論文での再審査

可　　不可

平成 24 年 2 月 3 日

審査委員長	公衆衛生・医療科学担当教授	加藤貴彦
審 査 委 員	生命倫理学担当教授	浅井 篤
審 査 委 員	法医学担当教授	西谷陽子
審 査 委 員	多能性幹細胞担当准教授	奈 和彦